

## 保育者の実践研究を支援する取り組み — 幼年教育研究施設と広島県私立幼稚園連盟の連携事業 —

中 坪 史 典

### Projects of supporting kindergarten teachers' practical research — Collaboration between the Research Institute of Early Childhood Education and Hiroshima Private Kindergarten League —

Fuminori NAKATSUBO

筆者が広島大学に着任して2ヵ月後の2007年12月、(財)広島県私立幼稚園連盟(以下、「私幼連」と表記)の「保育研究委員会」の担当者4～5名が私の研究室を訪ねられた。いずれも広島県内の私立幼稚園長である。私にとっては全員が初対面で少々緊張したが、どの方も一様に真剣な表情だったことが記憶に残っている。

「広島県の幼児教育力の向上と、各園の保育者の実践力育成のために、広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設(以下、「幼研」と表記)と連携したい。保育者の実践研究を支援する事業を立ち上げるので協力して欲しい…」という依頼であった。「保育現場は多忙で、個々の保育者が自己を磨いたり、実践研究したりする時間が持ちにくくなっている。しかし、保育者の学びの意欲が衰えているわけではない。だからこの事業を成功させたい…」という思いを熱心に話され、筆者は圧倒されるばかりであった。

こうして、「幼研」スタッフとの協議を経て「私幼連」との業務委託契約が正式に結ばれた。2008年4月、両者の連携事業がスタート、以後、以下のように2014年3月まで行われたのである。

#### <第Ⅰ期：2008年4月～2010年3月>

- 1 広島県内の私立幼稚園の保育者(保育歴3年以上)を対象に、事業への参加希望者を募集したところ、延べ19園から29名の保育者が参加した(2008年1月)。
- 2 参加した保育者を対象に、取り組みたい実践研究テーマを調査し(自由記述)、次の4つのテーマに集約された(「障害児への目線」「気になる子の保育」「協同性を育む体験と保育者の役割」「人的環境としての保育者を考える」)。参加した保育者は、自分が取り組みたい研究テーマごとに(各自の所属園を超えて)、4グループを編成した(2008年3月)。
- 3 「幼研」研究者(4名)が実践研究の支援者として各グループに配置した。同様に、大学院生(博士前期・後期課程)2名ずつが各グループに配置した(2008年4月)。
- 4 各グループで月1回、実践研究を進めるための会合を開催するとともに、年3～4回程度、4グループ合同の全体会を開催した。全体会では、各グループの実践研究の進捗状況を報告し合うとともに、講演会やセミナー、他県の私立幼稚園への視察研修などを行った。
- 5 各グループは、「平成21年度中国地区私立幼稚園教育研修会(岡山大会)」(2009年8月)において研究成果を発表した。

#### <第Ⅱ期：2010年4月～2012年3月>

- 1 広島県内の私立幼稚園の保育者(保育歴3年以上)を対象に、事業への参加希望者を募集したところ、延べ12園から25名の保育者が参加した(2010年4月)
- 2 参加した保育者を対象に、取り組みたい実践研究テーマを調査し(自由記述)、次の4つのテーマに集約された(「なぜ幼稚園カリキュラムを作成するのは難しいのか?」「幼児期の運動能力」「子どもと絵本」「幼児は遊びの中で何を学んでいるのかー鬼遊

びの事例を中心に」。参加した保育者は、自分が取り組みたい研究テーマごとに（各自の所属園を超えて）分かれ、4グループを編成した（2010年4月）。

- 3 「幼研」研究者（4名）が実践研究の支援者として各グループに配置した。同様に、大学院生（博士前期・後期課程）2名ずつが各グループに配置した（2010年4月）。
- 4 各グループで月1回、実践研究を進めるための会合を開催するとともに、年3回程度、4グループ合同の全体会を開催した。全体会では、各グループの実践研究の進捗状況を報告し合った。
- 5 各グループは、「平成23年度中国地区私立幼稚園教育研修会（山口大会）」（2011年8月）において研究成果を発表した。

### <第Ⅲ期：2012年4月～2014年3月>

- 1 広島県内の私立幼稚園の保育者（保育歴3年以上）を対象に、事業への参加希望者を募集したところ、延べ6園から14名の保育者が参加した（2012年4月）
- 2 参加した保育者を対象に、取り組みたい実践研究テーマを調査し（自由記述）、次の2つのテーマに集約された（「たたかいか」の中で子どもは何を経験しているか」「よく食べる子どもは運動が好きで体力があるのではないのか」）。参加した保育者は、自分が取り組みたい研究テーマごとに（各自の所属園を超えて）、2グループを編成した（2012年4月）。
- 3 大学院生（博士前期・後期課程）8名を各グループに配置した（2012年4月）。「幼研」研究者（4名）は、直接的支援に参与しなかった。
- 4 各グループの研究成果は、「平成25年度中国地区私立幼稚園教育研修会（鳥取大会）」（2013年8月）で発表を行った。

本事業の特徴として、(1)「幼研」と「私幼連」の連携に基づいて活動が展開されたこと、(2)保育者が取り組みたいニーズを重視して実践研究テーマが設定されたこと、(3)保育者の所属園を超えて研究グループが編成されたこと、(4)実践研究の支援者として大学院生を配置したことの4点を挙げることができる。

とは言え、本事業は、決して順風満帆に展開されたわけではない。特に、我々「幼研」研究

者が保育者の実践研究支援を通して感じた困難は、保育者との距離の取り方であった。保育者にとって研究者は実践研究の支援者であることから「支援する＝支援を受ける」の関係になりやすい。こうした研究者の「丁寧な」支援は、研究の主体としての保育者に対して、しばしば受動的態度を醸成したり、思考の停止をもたらしたりした。もちろん、「実践研究」という未知の体験に戸惑う保育者に対して「丁寧な」支援が必要なことも事実である。研究者は、保育者の主体性の確保と支援の間でジレンマを抱えることとなった。

他方、上記のジレンマに有益に機能したのが、大学院生であった。将来、保育者養成者を目指す彼（女）らにとって、保育者の実践研究を支える取り組みは、貴重な学びの場であるとともに、彼（女）らは、研究者と保育者の間で、状況に応じて自らのポジションを定めながら両者を繋ぐ役割を果たしていた。日頃自分の研究に苦慮している大学院生の存在は、保育経験を有するわけではなくとも、実践研究に戸惑う保育者の相談相手となっていた。特に<第Ⅲ期>において、「幼研」研究者が直接的支援に参与しなかった背景には、こうした理由がある。

尚、本事業の取り組みについて我々は、学術的に検討するとともに、その成果を以下の形で報告した。

### <学会発表>

- 中坪史典・七木田敦・杉村伸一郎・岡花祈一郎・中丸元良 2010「保育者の実践研究をどう進めるか（1）」日本保育学会第63回大会
- 中丸元良・中坪史典・七木田敦・杉村伸一郎・岡花祈一郎 2010「保育者の実践研究をどう進めるか（2）」日本保育学会第63回大会
- 伊藤優・境愛一郎・浦上萌・上山瑠津子 2013「実践研究に対する保育者と研究者の認識の相違—保育者の語りから—」日本教育心理学会第55回総会
- 浦上萌・伊藤優・境愛一郎・上山瑠津子 2013「実践研究についてホットな保育者とクールな研究者はどう語り合うか」日本質的心理学第10回大会
- 浦上萌・伊藤優・境愛一郎・上山瑠津子 2014「実践研究における保育者と研究者との連携のあり方—保育者の捉える大学院生の位置づけに着目して—」日本保育学会第67回大会
- 上山瑠津子・境愛一郎・伊藤優・浦上萌 2014「保

育者が研究者との実践研究に継続参加する  
要因の検討」日本発達心理学会第26回大会

<報告書>

- 中坪史典・杉村伸一郎・七木田敦・大野歩  
2013「保育者の自発的な専門性向上のための  
の大学研究者の役割」広島大学大学院教育  
学研究科共同研究プロジェクト 第11巻
- 中坪史典・七木田敦・杉村伸一郎・清水寿代・  
上山瑠津子・浦上萌・境愛一郎・伊藤優  
2014「保育者の自発的な実践研究を支援す  
るための大学研究者の在り方」広島大学大  
学院教育学研究科共同研究プロジェクト

第12巻

<論文>

- 境愛一郎・浦上萌・上山瑠津子・伊藤優・七木田  
敦・杉村伸一郎・中坪史典 2015「実践研  
究における保育者と研究者との連携のあり  
方—実践研究をめぐる認識の相違—」幼年  
教育研究年報37巻
- 伊藤優・浦上萌・上山瑠津子・境愛一郎・七木田  
敦・杉村伸一郎・中坪史典 2015「実践研  
究における保育者と研究者との連携のあり  
方—大学院生の役割に着目して—」幼年教  
育研究年報 37巻